

内野信子 提出学位申請論文（課程博士）

『蜻蛉日記の表現―道綱母の心情変容と兼家乖離―』 審査要旨

論文の内容の要旨

本申請論文は、『蜻蛉日記』のさまざまな表現が紡ぎ出す作中主体道綱母の心情を分析することを通して、道綱母が兼家からどのような経緯で精神的に乖離していくか、またその過程が『蜻蛉日記』の主題にいかに関わっていくのかを明らかにしようとしたものである。

本申請論文は、序及び、次の三篇十二章から構成されている。

第一篇 道綱母の本性と心情変容―兼家乖離を中心に―（七章）

第二篇 道綱母の和歌（二章）

第三篇 兼家を基点として読み解く道綱母の心情（三章）

第一篇は、「自照表現としての「われ」、「兼家の提言と道綱母の行動との捩れ―初度初瀬詣を中心に―」、「ものはかなし」から「あさまし」へ」、「途絶え」と連関する「なにかは」、「鳴滝参籠を变曲点とする「のどか」の位相」、「天禄三年春の「のどか」な「雨」、「あがたありき」―倫寧娘と兼家妻の間で―」の七本の論考からなる。

第一章では、上巻天曆八年秋の「さだめなく消えかへりつるそらだのめするわれはなになり」を対象として、「われ」は表現主体の自覚であり、その自覚が「ひと」を認識することになるとする。また、道綱母は、兼家との心的距離を確保することで、「われ」を保持しようとし、結婚初期、自己に没入する態で用いられていた「われ」が、「われはなになり」と問いかけることで自他を分離し客観し、夫兼家、結婚生活、そして自身をも客観するに至るとする。第二章では、『蜻蛉日記』上巻卷末初度初瀬詣でを対象として、往路と復路の

道綱母の心情の変容の検証を通して、道綱母と兼家との関係について論究する。本章は、安和元年十月二十六日の「大嘗祭の御禊」に女御に代わって奉仕した時姫の娘超子の歴史的事実を前提として、道綱母の初瀬詣でを問題とする。道綱母にとって、超子の女御代の奉仕は「わがかたのことにしあらねば」であるが、時姫と交流のあった道綱母は、女御代の準備を手伝う心づもりはあったとする。なぜなら、兼家の「これ過ぐしてもろともにはやは」の提案は、女子に恵まれぬ忸怩たる思いにある道綱母の心情を刺激したからだとする。兼家の迎えを受けた復路が往路の物寂しさを払拭するものであり、帰宅後、超子の奉仕の準備に携わるところに道綱母の捻れの感情があり、それが兼家乖離へと道綱母を導くものとした。第三章では、『蜻蛉日記』の主題を醸成するものであり、と同時に町の小路の女によって引き出された「ものはかなし」と「あさまし」の二語を対象として、道綱母のあり方を論究する。兼家に向けた驚きと侮蔑の感情を「あさまし」と規定し、「ものはかなしい自己」を「あさまし」と客観することで、

道綱母が兼家から乖離しようとは決意したものとす。兼家に執する自己を「あさまし」と客観し、夫からの乖離を遂げることで、「ものはかな」い心情が道綱母を造型する要素として作品から後退したのだとする。第四章では、鳴滝参籠後に用いられる「なにかは」を対象として、町の小路の女の登場とともにじまる兼家の「途絶え」との関係について論究する。「なにかは」は、道綱母が兼家の「途絶え」を甘受し得たとき、なに恐れることなく発せられた表現であるとする。その結果、「なにかは」という語を発語した道綱母は兼家の妻妾としての自己からの開放をうながすこととなったとした。第五章では、上巻、中巻、下巻の「のどか」を対象として、兼家と道綱母との夫婦関係を論究する。上巻の「のどか」はすべて兼家に関わって用いられ、夫婦の関係の良好さを示し、妻としての充足感の表現であるとする。中巻の「のどか」は兼家との心的距離を確実にしたことによる静穏な心情であるとする。下巻では、この穏やかな「のどか」さの中に再び兼家が訪れはするものの、そこには兼家との関係にあきら

めの心情が内在するものとなっていたとする。第六章では、下巻の天禄三年二月、三月の春の「雨」の「のどか」さを対象として、情景としての「雨」とそこからたされる「のどか」な道綱母の精神との関係を論究する。「雨」が恋を妨げる「のどか」ならぬ天象であるとした上で、道綱母にとって「のどか」な「雨」は、兼家に対する希求や願望を放棄することで心の安定へと導くものであるとした。第七章では、父倫寧を「あがたありき」と呼称することを対象として、兼家妻から倫寧娘への変容を中心に、倫寧に対する道綱母の認識の位相について考究する。道綱母の父倫寧の呼称が、結婚以前の「親とおぼしき人」・「頼もしき人」、床離れて以後の「古めかしき人」と変更することをふまえて、道綱母における父倫寧の存在のあり方が変貌していることを述べる。

第二篇は、「独詠歌を詠まなかつた道綱母」、「道綱母の兼家乖離と下巻の贈答歌群」の二本の論考からなる。

第一章は、天禄三年一月、兼家からの精神的な乖離をとげた道綱母が、雪の

中に鶯の初声を聞きながら、「まいて、ここちも老い過ぎて、例の、かひなきひとりごともおぼえざりけり」とある文章を対象として、道綱母が和歌を詠まなかつた意義について論じたものである。道綱母となった作中主体は遠度の養女求婚譚、道綱恋愛譚を記すにあたり、精神の老いを自覚し、兼家からの精神的な乖離を確実のものとして自己に取り込む中で、道綱母の詠作不能という現実があつたとする。第二章は、下巻天禄三年閏二月、道綱母と兼家との最後の贈答などを対象として、中巻において、上巻より少なくなった贈答歌の意義を明らかにしようとしたものである。道綱母は、「おどろかしても、くやしげなるほどをなむ」という兼家の態度に幻滅し、兼家の和歌はこのち記さなかつたのだとする。和歌表現者としての兼家を作品から退場させ、兼家からの精神的乖離を確認したあと、道綱母は遠度の養女求婚と、息子道綱のふたつの恋に関わっているが、それは、表現主体が兼家の妻から道綱の母へと変わる中で、「あへなかりしすぎごと」を懐かしむ道綱母としての心情が選ばれたものである。

とする。

第三篇は、「紛らはす」―兼家変貌を実感させる語として―、「兼家の「さかさまごと」―道綱母の心情変容を裏付ける語として―」、「むかしすぎことせし人」―非兼家説の可能性をめぐって―」の三本の論考からなる。

第一章は、『蜻蛉日記』の「紛らはす」三例と、「言ひ紛らはす」一例が和歌贈答に関わるとの事実を対象として、道綱母の兼家との結婚生活における不安の内実を説くものである。結婚前は道綱母が兼家の返歌を「紛らはし」ていた。しかし、結婚後は、兼家が再三返歌を省き、返歌のかわりに直接訪れたことが「みづから来て紛らはしつ」と記されることを前提として、道綱母が求めたのは兼家の返歌であり、結婚前の贈答に見られる兼家のまめまめしき態度を期待していたとする。さらに、兼家の返歌をしない「言ひ紛らはす」態度は、道綱母の結婚生活への不安を増幅させるものであったとする。第二章は、下巻天禄三年一月条で、兼家が「なにごとかある。騒がしうてなむ。などかおとをだに。つ

らし」などと、「さかさまごと」を言ってきた兼家を対象として、道綱母における兼家の妻の座について論究する。天禄二年の鳴滝参籠を境に、道綱母が兼家との精神的な距離を取ろうとしていたとの前提に立って、道綱母が兼家妻の座への執着を手放したときに兼家が発した言葉が「さかさまごと」であったとする。第三章は、兼家が町の小路の女のもとに通い、夫婦仲がぎくしゃくしていた天暦十年八月に、「むかしすぎごとせし人もいまはおはせずとか」という条を対象として、「むかしすぎごとせし人」を兼家ととる説について再検討している論である。「むかし」、「すぎごと」などの語義を検証し、「すぎごとせし人」を、『蜻蛉日記』の序文に続く「あへなかりすぎごとども」に関わる人物と解することができるとする。その道綱母への懸想人が「いまはおはせずとか」と、兼家の途絶えを揶揄していると仮定できるならば、道綱母の「ものしうのみおぼゆれば、日暮はわびしうのみおぼゆ」という心情が理解できるものであるとする。

論文審査の結果の要旨

道綱母と兼家との結婚生活については、歴史資料によらずに『蜻蛉日記』によるところが大きい。しかし、これまでの蜻蛉日記研究においても、『大鏡』兼家伝においての「女君、なげきつつ一人寝る夜のあるまはいかに久しきものとかは知る」の詠出状況と、『蜻蛉日記』のそれに関わる叙述とはまったく異なるものであるとの指摘がなされてきた。『蜻蛉日記』に描かれる道綱母像と歴史的事実としての道綱母とを弁別する困難があるのである。この問題について、本申請論文では、作中主体道綱母と表現主体道綱母と規定して論述し、作中主体道綱母の心情を対象として論じたところに特徴があるといえる。このことを前提として、本申請論文は、『蜻蛉日記』のさまざまな表現が紡ぎ出す作中主体道綱母の心情を分析することを通して、道綱母が兼家からどのような経緯で精神的に乖離していくのか、またその過程でどのように『蜻蛉日記』の

主題が紡ぎ出されていくのかを明らかにしようとしたものである。

第一篇「道綱母の本性と心情変容―兼家乖離を中心に―」は、「われ」・「ものはかなし」・「あさまし」・「途絶え」・「なにかは」・「のどか」・「あがたありき」などの表現を対象として、道綱母の心の有り様が、上巻、中巻を経て下巻に至る過程でどのように変容し、そのことが兼家との夫婦関係にどのように組み込まれているのかを明らかにしようとしたものである。とくに第一、二、三、四章が注目された。第一章「自照表現としての「われ」」では、上巻天曆八年秋の「さだめなく消えかへりつるそらだのめするわれはなになり」を対象として、「われ」は表現主体の自覚であり、その自覚が「ひと」を認識した上で、「ひと」に頼ることで損なわれていく「われ」とは「なに」かと追求し続けたところに、『蜻蛉日記』の本質のひとつがあるとした点は評価できるものである。ただ、論の一つの根拠になっている「われは」の「は」の語法的意味について再度検証する必要があるであろう。また、町の小路の女との問題に端緒をもつ、上巻の「わ

れはわれにもあらず」と、中巻巻頭の安和二年正月二日の「われは、すべて、近きがするところなり、くやしく、など思ふほどに」のそれぞれの「われは」の「は」の個別の用法についても確認すべきであろう。次に、第二章「兼家の提言と道綱母の行動との捩れ―初度初瀬詣を中心に―」で、『蜻蛉日記』上巻巻末初度初瀬詣でを対象として、往路と復路の道綱母の心情の変容の検証を通して、道綱母と兼家との関係を明らかにしようとした点は評価できるものである。とくに安和元年十月二十六日の「大嘗祭の御禊」に女御に代わって奉仕した時姫の娘超子の歴史的事実を前提として、道綱母の初瀬詣でを問題とした点は興味深いものであった。しかし、『蜻蛉日記』という作品世界の叙述と、歴史的事実性とをどのように規定するのかについて、申請者自身による歴史叙述と『蜻蛉日記』の記述との関係について、少なくとも論の対象となった超子の大嘗祭の御禊を対象とする際には、「大嘗祭の御禊」の平安時代における歴史認識を示す必要があるであろう。次に、第三章「ものはかなし」から「あさ

まし」へ」では、「ものはかなし」と「あさまし」の二語を対象として、道綱母の精神を動的に把握しようとした点も評価できるものである。兼家に向けた驚きと侮蔑の感情を「あさまし」と規定し、「ものはかな」き自己を「あさまし」と客観化しているとし、さらに、兼家からの精神的な乖離を遂げることで「ものはかな」き心情が作中主体道綱母像を造型する要素として、『蜻蛉日記』上巻から後退したのだとした点は、「ものはかなし」・「あさまし」が道綱母の心情を主題的に醸成していく表現としてであると論じるものであり、意義ある成果といえる。しかし、本論の基調にある「夫兼家からの乖離」という結論が先行していることは否めない。上巻の冒頭部「かくありし時過ぎて、世の中にいともものはかなく、ともかくにもつかで、世に経る人ありけり」及び上巻の末尾「なほものはかなきを思へば、あるかなきかのこちするかげるふ日記といふべし」と、申請者が述べる「自己を客観化する「あさまし」」との関係について、具体的な論述があればより有効な論となったところである。さらに、第

四章では、鳴滝参籠後に用いられた「なにかは」を対象として、町の小路の女の登場とともに始まる兼家の「途絶え」と兼家の妻妾としての自己からの開放との関係について論究しようとした点も評価できるものである。第一、二、三、四、の各章の問題は、あわせて論じられることにより、上巻から中巻にかけての道綱母の心情の変容が浮き彫りされ、その結果として、兼家と道綱母との精神的な距離の内実が明らかになったものとして支持されるものである。

第二篇「道綱母の和歌」では、下巻冒頭部の天禄三年一月条で道綱母が独詠歌を詠まなかった理由と天禄三年閏二月条での兼家との贈答歌のあり方を検証することを通して、道綱母と兼家との精神的な距離をはかろうとした点は評価できよう。とくに第一章において、下巻天禄三年一月の「まいて、ここちも老い過ぎて、例の、かひなきひとりごともおぼえざりけり」の表現に注目して、道綱母の「老い」の意識と兼家との関係を分析した上で、彼女が和歌を読まなかった問題について論じた視点は首肯されよう。ただ、道綱母となった作中主

体が、遠度の養女求婚譚、道綱恋愛譚を記す中で精神の老いの自覚をし、兼家乖離を確実のものとして自己に取り込むという現実があったとする論理にはやや疑問が残る。申請者の用いる「兼家乖離」と、道綱母が和歌を詠じること、さらにそれを書きつける表現主体道綱母との関係についての論があれば、より確実になったものと思われる。

第三篇「兼家を基点として読み解く道綱母の心情」では、第一章で「紛らはす」と「言ひ紛らはす」語を対象として、道綱母の兼家との結婚生活における不安の内実を明らかにしようとした点は首肯されるものであった。結婚前には、道綱母が兼家の返歌を「紛らはし」ていたのに対して、結婚後は、兼家が返歌のかわりに直接訪れたことが「みづから来て紛らはしつ」と記されることを確認し、さらに、兼家の返歌をしない「言ひ紛らはす」態度は、道綱母の結婚生活への不安を増幅させるものであったとした点も注目された。「紛らはす」主体が道綱母から兼家へと変わっているという事実をふまえて、「紛らはす」が

二人の関係を象徴する表現として意味づけられるとした点は有意義な成果であるといえる。

右のように、本申請論文は、『蜻蛉日記』における道綱母と兼家との関係について、「われ」・「ものはかなし」・「あさまし」・「なにかは」・「のどか」・「紛らはす」などの表現や、道綱母と兼家の和歌表現の分析、検証を通して、上巻から下巻にかけての時間的経過の中で紡ぎ出されていく道綱母の心情の有り様及び作品展開における意義を明らかにし、新たな『蜻蛉日記』の表現論を構築した点は十分に評価できるものである。

以上から、本論文提出者内野信子は博士（文学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十二年二月十八日

主查	國學院大學教授	針本	正行	印
副查	國學院大學教授	豐島	秀範	印
副查	國學院大學教授	秋澤	瓦	印